

〈論文〉

「に」による日本語表現の生成と展開

阿久津 智

平山 紫帆

要 旨

本稿では、機能語「に」が日本語表現の生成や展開において果たしてきた役割を、文法・意味、第二言語習得、文章（文体）、談話の各側面から、通時的・共時的に探り、次のことを述べた。(1) 格助詞「に」は、古代語において、多くの用法を担っており、現代語における格助詞「に」の用法の多さもこれを引き継ぐもので、これは、また、日本語学習者の使う日本語に「に」に関連する誤用が多いことにもつながっている。(2) 古代～近世の文章（文体）において、格助詞「に」、および、その転じた接続助詞「に」は、和文の文章展開において重要な役割を担っており、一方、「～に」型の副詞や、格助詞「に」から派生した複合辞は、漢文訓読体において多用されている。近代文学（近代小説）の誕生には、「に」を多用する文章展開・文体からの脱却がかかわっている。(3) 現代語の談話において、「に」にディスコースマーカーとしての機能がみられるようになってきている。

キーワード：格助詞「に」、接続助詞「に」、文章展開、近代文学、ディスコースマーカー「に」

1. はじめに

本稿では、日本語の文法的機能要素（以下「機能語」）のなかで、とりわけ成立が古く、意味・用法（以下「用法」）が多く、日本語の文章にお

いて重要な役割を果たしてきた「に」に注目して、文法・意味、第二言語習得、文章（文体）、談話の各側面から、「に」による（広く「に」に関連する）日本語表現の生成や展開について、通時的・共時的に俯瞰していく。そこから、機能語「に」が日本語表現の生成や展開において果たしてきた役割を示したい。

本稿における「に」には、格助詞の「に」だけではなく、指定の「に」（断定の助動詞「なり」の連用形、ナリ活用の形容動詞連用形の活用語尾、副詞の「～に」。以下、併せて「指定辞」と呼ぶ）、格助詞「に」の転じた接続助詞の「に」、格助詞「に」から派生した機能語（複合辞）などを含む。ただし、以上の「に」とは別系統（語源）と思われる、完了の助動詞「ぬ」の連用形の「に」、打ち消しの助動詞「ず」の連用形（上代）の「に」は、ここでは扱わない。

以下、主に次の点について見ていく。いずれも、先行研究の成果のほか、各種データベース・コーパスによって求めた用例を利用する。

(ア) 文法・意味の側面から

- ①古代語における格助詞「に」の用法
- ②現代語における格助詞「に」の用法

(イ) 第二言語習得の側面から

日本語学習者の日本語にみられる格助詞「に」の誤用

(ウ) 文章（文体）の側面から

- ①古代～近世の文章における、指定辞、格助詞、接続助詞、複合辞の「に」の多用
- ②近代の文章における「に」の多用の終焉

(エ) 談話の側面から

現代語の会話における特徴的な「に」の用法

以上の(ア)～(エ)について、本稿で述べる点（結論）を、前もってまとめて示して、本稿の見取図としておく。

- (ア①) 格助詞「に」は、古代語において、多くの用法を担っていた。
- (ア②) 現代語における格助詞「に」も古代語を引き継ぐ多くの用法をもつ。
- (イ) 格助詞「に」の用法の多さは、日本語学習者の使う日本語に、「に」に関連する種々の誤用がみられることにもつながっている。(以上2節)
- (ウ①) 格助詞「に」、および、その転じた接続助詞「に」は、和文の文章展開において重要な役割を担っており、一方、「～に」型の副詞（指定辞）や、格助詞「に」から派生した複合辞は、漢文訓読体において多用されている。(3節)
- (ウ②) 「に」を多用する文章展開・文体からの脱却が近代文学（近代小説）の誕生にかかわっている。(4節)
- (エ) 現代語の談話において、「に」にディスコースマーカーとしての機能がみられるようになってきている。(5節)

2. 格助詞「に」の用法（文法・意味、第二言語習得の側面）

本節では、文法・意味の側面から、古代語における格助詞「に」の用法と(2.1)、現代語における格助詞「に」の用法について述べ(2.2)、第二言語習得の側面から、日本語学習者の日本語にみられる格助詞「に」の誤用についてみていく(2.3)。

2.1 古代語における格助詞「に」の用法

2.1.1 格助詞「に」の成立

「に」は、文献以前の時代に成立した格助詞で、その起源（語源）ははっきりしないという（松村編 1969：340-341（松尾拾執筆）、鈴木・林編 1985：124-125（沖森卓也執筆））。「に」は、「が」、「を」と並ぶ、「文法格」（構造格）を示す重要な格助詞であるが⁽¹⁾、「を」、「が」に先んじて成立している。

これを反映すると思われるものに、『古事記』（712）にみられる、正格漢文の語順とは異なる、「（主格-）対格-動詞-与格」という語順がある（正格漢文の語順は「（主格-）動詞-対格-（於）与格」）。

(01) 多禄給^{あま}其老女^{たまひもの}（多たの^そ禄^{おみな}を其の老女に給ひて^{たま}）

『古事記』下巻・雄略天皇
（『新編 日本古典文学全集 1』小学館 1997：344）

例 01 は、対格（「多禄」）は転倒させず、与格（「其老女」）だけを転倒させて訓読する語順になっている。この語順は、「～を」と「～に」を読み分けるための措置とも考えられるが（中川 1995：162）、別の見方として、「に」は不可欠であるが、「を」はなくてもいい（「多たの禄、其の老女に給ひて」と読んでもいい）という格助詞としての必要度（確立の度合）の違いが現れているとみることもできる（沖森 2000：157-159）。

2.1.2 古代語における格助詞「に」の用法

早くに成立した格助詞「に」は、当初から多くの用法を担っていた（橋本 1969：121）。その通時的な展開について、橋本進吉は、「に」の原義を「所をあらはすもの」とありとし、それが、「時を示すものに用ゐられ、又

一方、到着する場所を示し、遂に帰着する所のものを示し、それから、相手や、土台になるもの、比較の標準になるもの、原因となるものなどをも示し、又一方副詞的のものを導くやうになつた」（具体的な関係を示すものから抽象的な関係を示すものへと発展していった）とみている（橋本 1969：127-128）。

古代語における格助詞「に」の主な用法を挙げてみる（表1）⁽²⁾。

表1 古代語における格助詞「に」の用法⁽³⁾

意味・用法	例文
(1)場所（～に／で）	片田舎に住みけり（伊勢物語）
(2)方向（～に／へ）	南北に走る（方丈記）
(3)帰着点（～に）	駿河の国に至りぬ（伊勢物語）
(4)動作の対象（～に）	異人にあはせむと言ひけるを（伊勢物語）
(5)受身の動作主（～に）	舅にほめらるる婿（枕草子）
(6)使役の対象（～に）	下部に酒飲ます（徒然草）
(7)尊敬（～におかれては）	上にも聞こしめして（枕草子）
(8)時（～に）	桂川、月の明きにぞ渡る（土佐日記）
(9)目的・目標（～に）	迎へにまうで来むず（竹取物語）
(10)原因・理由（～に／によって）	近き火などに逃ぐる人は（徒然草）
(11)手段・方法（～で／によって）	火に焼かむに（竹取物語）
(12)比較・基準（～に／と）	ひとへに風の前の塵に同じ（平家物語）
(13)比喩（～のように）	我が身時雨にふりぬれば（古今集）
(14)添加（～に）	赤地錦の直垂に、唐綾緞の鎧着て（平家物語）
(15)結果（～に／と）	昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今集）
(16)状態（～で）	花ぞ昔の香に匂ひける（古今集）
(17)資格・地位（～として）	舞人に召されたり（蜻蛉日記）
(18)知覚の内容（～と）	あたらしきものに思ひて（源氏物語・帚木）
(19)強調（～に～）	すなはちただ開きに開きぬ（竹取物語）

「意味・用法」の（）内は、対応する現代語の表現。「例文」の（）内は出典。

古代語の格助詞「に」には、後世に「で」によって担われるようになる用法がとくに多くみられる⁽⁴⁾。例 02～06 は、現代語の「で」に相当する「に」の例である（小田 2020：268-269。[] は筆者による。現代でも文語的な表現では「に」を使うことがあるものを含む）。

- (02) この岡に菜摘ます兎 (万葉集 1) [動作の場所]
- (03) 車に着たりける衣ぬぎて (大和物語 148) [動作の場所]
- (04) 九月九日の菊を、あやしき生絹すずし きぬの衣ぬいに包みて参らせたるを (枕草子 36) [手段]
- (05) ただ翁びたる声こゑに額ぬかづくぞ聞こゆる。(源氏物語・夕顔) [状態]
- (06) 馬に乗りて、筑紫よりただ七日に上りまうで来たる。(竹取物語) [期間 (表 1 にこの用法は挙げていない)]

2.1.3 「～に思ふ」と「～に相あひ… [複合動詞]」

次に、古代語において、格助詞「に」が広く使われ、他の格助詞と意味領域が重なる用法をもっていたことをみていく。その例として、「～に思ふ」と「～に相あひ… [複合動詞]」を取り上げる。

2.1.3.1 「～に思ふ」

「思ふ」の思考内容を示す格助詞には、古代語においても現代語と同様に、主に「と」が使われるが (例 07・08)、古くは「に」も使われている (例 09・10)。「～に思ふ」は、現代語の「～ (の) ように思う」に近いのではないかと思われる (例 07～16 は、『日本語歴史コーパス』によって求めた。以下、用例のルビは底本 (引用元) による。下線は筆者による)。

- (07) うぐひすのこゑ声すは過ぎぬと思おもへども (宇具比須乃 許惠波須疑奴等 於毛倍杼母)

『万葉集』 卷第二十 4445 番歌

(『新編 日本古典文学全集 9』 小学館 1996 : 420)

- (08) 女、かぎりなくめでたしと思へど、

『伊勢物語』 十五

(『新編 日本古典文学全集 12』 小学館 1994 : 127)

- (09) その男、身をえうなきものに思ひなして、

『伊勢物語』九

(『新編 日本古典文学全集 12』小学館 1994 : 120)

- (10) ここにも、いまはかぎりに思ふ身をばさるものにて、

『蜻蛉日記』下

(『新編 日本古典文学全集 13』小学館 1995 : 282)

2.1.3.2 「～に相… [複合動詞]

「相…」という複合動詞は、現代語では、相手を「と」で示して、「互いに…」(相互, 「相通じる」など), あるいは「一緒に…」(共同, 「相携える」など)といった意味で使われるが、古くは、このほかに、「何か(誰か)に対して…」(動作の対象)という用法があり、その相手を示すのに、元の動詞に応じて、「に」、または「を」が使われている(例 11・12)⁽⁵⁾。相互・共同の場合にも、「と」だけではなく、「に」が使われている(例 13~16)。

- (11) 我が背なに 相寄るとかも (和賀西奈尔 阿比与流等可毛)

『万葉集』卷第十四 東歌 3483 番歌

(『新編 日本古典文学全集 8』小学館 1995 : 495)

- (12) 妹を相見て 後恋ひむかも (妹乎相見而 後将恋可聞)

『万葉集』卷第十二 3141 番歌

(『新編 日本古典文学全集 8』小学館 1995 : 363)

- (13) 香具山は 畝傍雄々しと 耳梨と 相争ひき (高山波 雲根火雄男 志等 耳梨与 相争競仗)

『万葉集』卷第一 13 番歌

(『新編 日本古典文学全集 6』小学館 1994 : 32)

- (14) いと忍びたる女にあひ語らひてのち、

『後撰和歌集』（951 宣旨）卷九 恋一 550 番歌詞書
（『新 日本古典文学大系 6』 岩波書店 1990：160）

(15) 人とあひ乗りて ^{すだれ}簾をだに上げたまはぬを、

『源氏物語』『葵』

（『新 日本古典文学大系 21』 岩波書店 1995：30）

(16) 公資に ^{より} ^{あひく}相具して ^{はべ}侍りけるに、

『後拾遺和歌集』（1086）卷十一 恋一 640 番歌詞書
（『新 日本古典文学大系 8』 岩波書店 1994：209）

2.2 現代語における格助詞「に」の用法

続いて、現代語における格助詞「に」についてみていく。古代語における格助詞「に」の用法は、その一部が（後に発展した）他の格助詞によって担われるようになったが、多くが現代語の格助詞「に」に受け継がれている。「に」は、現代語の格助詞のなかで、用法が最も多い（国立国語研究所 1951：135-152, 国立国語研究所 1996：244-251, 荘司 2015：118）。

現代語における格助詞「に」の用法としては、たとえば、以下のようなものが挙げられる（表 2）。

これらは、基本的に、古代語の格助詞「に」の用法（表 1 参照）を受け継ぐものである。

なお、現代語の格助詞「に」の典型的な意味（中核的な意味）が何であるかについては諸説があるが、たとえば、杉村（2002：40）は、「プロトタイプの意味」を「着点」とし、大きく、「①存在の場所・時点、②方向性を持った動きの着点、③被動的行為の動作主」の 3 つの用法があるとしている。また、森山（2008：131-132, 144）は、格助詞「に」には、大きく分けて、「〈移動先〉や〈動作の相手〉などの「プロセス的用法」と、〈存在の位置〉や〈経験主〉などの「存在論的用法」がある」とし、「二格

表2 現代語における格助詞「に」の用法⁽⁶⁾

意味・用法	例文
(1)場所	駅の前に大学がある。
(2)所有者	私には子供が3人ある。
(3)時間	朝9時に出勤する。
(4)目的	映画を見に行く。
(5)着点	10分ほどで目的地に着く。
(6)受け取り手・受益者	子供にお菓子をやる。
(7)相手	恋人に会う。
(8)対象	提案に賛成する。
(9)受身の動作主	妻に買い物を頼まれた。
(10)使役の動作主	子供にピアノを習わせる。
(11)動作主	私にはそれはできない。
(12)状態	着替えを多めに持っていく。
(13)変化の結果	氷がとけて水になった。
(14)原因	あまりの寒さに外出をとりやめた。
(15)比較の基準	家族の笑顔にまさる幸せはない。
(16)並立	オレンジにマンゴーにマスカットなど。

全体の超スキーマ」を「対峙領域に位置し、ガ格参与者に対し対峙する対象（場所や参与者）を表す格」と認め、「二格のプロトタイプ」を「移動先」としている。

2.3 日本語学習者の格助詞「に」の誤用

日本語学習者の格助詞の誤用では、「に」に関するものが最も多くみられる（家田・中村 2017: 24, 于 2013: 61-62）。これは、「に」は多くの用法をもつため、用法の習得が難しい、他の機能語と意味領域が近くなることで混同が起きやすい、ということなどによるものだと思われる。学習者の誤用には、たとえば、「に」と「を」の混同のような文法格（必須補語、あるいは文型）における誤用、「に」と「で」の混同のような意味格（副次補語）における誤用などがある（市川 1997: 241, 庵 2017: 9）。また、

時間表現などに多くみられる、「に」の不使用、あるいは「に」の過剰使用などもある（呂 2022：136）。以下、『国際日本語学習者作文コーパス及び誤用辞典』から、「に」と他の格助詞の混同による、日本語学習者の誤用例を挙げる（下線部は誤用、（→）は同辞典による訂正）。

- (17) 他の文化を（→に）接することができれば、敵意が少なくなるだろう。（母語：英語）
- (18) よく毎回先生の家に（→を）訪ねていたことを思い出します。（母語：中国語）
- (19) 例えば、ビジネス文化や「いいえ」ってあまりはっきり言わないことやレストランなんかの中に（→で）喫煙ができることです。（母語：英語）
- (20) 毎回、大学に近いところが（→に）ある先生の寮に（→で）論文を指導されました。（母語：中国語）

例 17・18 は、「に」と「を」の混同、例 19・20 は、「に」と「で」などの混同である。このうち、例 19 のような誤用については、意味領域が近いことによる混同というとらえ方のほかに、日本語学習者が、「に」と「で」の使い分けの戦略として、「位置を示す名詞（例：「中」、「前」）+ 「に」という「1つのユニット」を形成していることによるものではないかという見方がある（迫田 2020：117-120）。

以上、本節では、格助詞「に」が古代語において多くの用法を担っていたこと、現代語でもそれを引き継ぐ多くの用法をもつこと、その用法の多さが日本語学習者の「に」に関連する誤用の多さにつながっているということを見てきた。

3. 古代～近世の文章における、指定辞、格助詞、接続助詞、複合辞の「に」の多用（文章（文体）の側面）

本節と次節では、文章（文体）の側面から、古代～近世の文章における、指定辞、格助詞、接続助詞、複合辞の「に」の多用と、近代の文章における「に」の多用の終焉についてみていく。

機能語「に」には、格助詞のほかに、状態を指定する「に」の発展した、断定の助動詞「なり」の連用形の「に」、ナリ活用の形容動詞連用形の活用語尾の「に」、および副詞の「～に」があり、また、格助詞「に」から転じた接続助詞の「に」や、格助詞「に」から派生したさまざまな複合辞がある（3.1）。これらのうち、接続助詞「に」は、和文の文章展開において重要な役割を担っており、一方、副詞の「～に」や格助詞「に」から派生した複合辞は、漢文訓読体において多用されている（3.2）。本節では、以上についてみていく。

3.1 「に」の派生語

3.1.1 指定の「に」の派生語

状態を指定する「に」（指定辞の「に」）は、格助詞「に」と本質的に変わらないものとされる（此島 1966：72-74）。この指定の「に」は、副詞の語尾（副詞の一部）の「に」となり、また、断定の助動詞「なり」（「に」＋「あり」に由来）が成立し（奈良時代以前）、ナリ活用の形容動詞が整備される（平安時代）と、それぞれの連用形としての役割を担うようになった（此島 1983：108-110、沖森 2017：96, 160-161）。

「～に」型の副詞（「頻りに」、「速やかに」、「互ひに」、「密かに」など）は、平安時代に漢文訓読語として多く作られ、多用された（築島 1965：77）。その多くは、明治期の漢文訓読体の文章や普通文などにも用いられ

て、今日に受け継がれている（高野 1991：402）⁽⁷⁾。

また、ナリ活用の形容動詞連用形の「～に」は、現代の形容動詞連用形の「～に」に引き継がれている。断定の助動詞「なり」の連用形を引き継ぐ「に」は、今日の学校文法などでは、格助詞として扱われている⁽⁸⁾。

3.1.2 格助詞「に」の派生語

「寄りて見るに、筒の中光りたり」（『竹取物語』）の「に」のような、古代語における接続助詞の「に」は、活用語の連体形に直接付いた（「時」を示す）格助詞の「に」が、前件と後件との関係（継起、順接条件や逆接条件）を表すようになったものとされる（京極 1987：193）。「に」による従属節は、後件の結びつきが緩やかで、順接にも逆接にも使うことができ、従属節の内部にさまざまな要素を含めることができる（現代語の「が」や「けれど」のレベルに相当する）（近藤 2000：407）。こういった使い勝手のよさから、接続助詞「に」は、平安時代の話し言葉に基づく和文（仮名文）において多用され、和文における文章展開の上で重要な役割を果たしていたとされる（京極 1987：199-201）。一方で、漢文訓読においては、あまり使われなかったようである（築島 1965：62-63、峰岸 2022：257）。

接続助詞「に」は、明治以降は使われなくなっていく。しかし、今日でも、「要するに」や「思うに」のような慣用的な表現のなかには残っている（京極 1987：201-202、鈴木・林編 1985：185（阿部八郎執筆））。また、接続助詞ではないが、「に」を含むものとして、動詞の連体形にそのまま接続する機能語・機能表現（「（始める）に先立って」、「（反対する）に決まっている」など）が今日でも多くみられる（荘司 2015：85-86）。

ほかに、平安時代には、「に」から派生したさまざまな複合辞が使われるようになっている。たとえば、現代語の格助詞「で」に当たるものとして、和文（仮名文）では「にて」が、漢文訓読では「にして」が多用されている（築島 1965：708, 865）。「にて」と「にして」は、明治中期以降、

次第に使われなくなる（鈴木 2003：4）。漢文訓読に多用される「において」（「におきて」に由来）、「によつて」（「によりて」に由来）などは、現代語でも使われている。

3.2 「に」による文章展開・文体

古代～近世の文学作品には、種々の（格助詞、指定辞、接続助詞、複合辞の）「に」が用いられている。とくに和文には接続助詞「に」（あるいは、「時」などを表す格助詞「に」）を使って節を重ねていくような文章展開がよくみられる。物語（説話）の冒頭には、「（[時]に）[場所]に…」で始まるものが多くみられる（例 22～26）。また、漢文訓読体（和漢混漚文）の文章では、「～に」型の副詞や、「に」から派生した複合辞が多く使われている（例 27）。以下、平安～江戸時代の代表的な文学作品から例を挙げる（接続助詞の「に」と格助詞の「に」（結果・状態以外）に、とくに二重下線を付しておく。例 21～27 は、ジャパナレッジ『日本古典文学全集』による）。

- (21) たけとりの^{おきな}翁、竹を取るに、この子を見つけて後^{のち}に竹取るに、
^{ふし}節をへだてて、よごとに、^{こがね}黄金ある竹を見つくることかさなり
 ぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。この児^{ちご}、やしなふほ
 どに、すくすくと大きになりまさる。^{みつぎ}三月ばかりになるほどに、
 よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどかくして髪あげさ
 せ、^{もき}裳着す。

『竹取物語』

（『新編 日本古典文学全集 12』小学館 1994：17）

- (22) むかし、男、かたるなかにすみけり。男、^{みやづか}宮仕へしにとて、別
^へれ惜しみてゆきにけるままに、^{みとせ}三年來ざりければ、待ちわびたり
 けるに、いとねむごろにいひける人に、「^{こよひ}今宵あはむ」とちぎり

たりけるに、この男来たりけり。

『伊勢物語』二十四「梓弓」

(『新編 日本古典文学全集 12』小学館 1994 : 127-128)

- (23) いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

『源氏物語』『桐壺』

(『新編 日本古典文学全集 20』小学館 1994 : 17)

- (24) あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおほえ語らむ。

『更級日記』

(『新編 日本古典文学全集 26』小学館 1994 : 279)

- (25) これも今は昔、比叡の山に児ありけり。僧たち宵のつれづれに、「いざ、搔餅せん」といひけるを、この児心寄せに聞きけり。「さりとて、し出さんを待ちて寝ざらんもわろかりなん」と思ひて、片方に寄りて、寝たる由にて出で来るを待ちけるに、すでにし出したるさまにて、ひしめき合ひたり。

『宇治拾遺物語』巻第一「十二 児の搔餅するに空寝したる事」

(『新編 日本古典文学全集 50』小学館 1996 : 45)

- (26) 下総の国葛飭郡真間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より旧しくここに住み、田畠あまた主づきて家豊に暮しけるが、生長て物にかかはらぬ性より、農作をうたてき物に厭ひけるま

まに、はた家貧まづしくなりににけり。

上田秋成『雨月物語』（1776刊）巻之二「浅茅が宿」

（『新編 日本古典文学全集 78』小学館 1995：306）

- (27) 熊野くまの三まるり参ひやくにちこもりテ百日こ籠ことテ此きしやうノ事ゆめヲ祈しめ請のたまズルニ、夢のたまニ示しめシテ宣のたまハク、
 「我わレ此こノ事ことニ於おいテ力ちから不およ及ぼズ。速すみやかニ住すみよし吉みやうじん明まうすべ神まうすべニ可こと申ことシ」
 ト。明みやうれん蓮ゆめ夢みやうじんノ告つげニ依よりテ、忽たちまちニ住すみよし吉まるり三ひやくにちこもり参こテ百こと日こと籠ことテ此ことノ事ことヲ
 祈きしやう請ゆめズルニ、夢みやうじんニ、明のたま神わ告またテ宣こハク、「我ことレ亦こと此ことノ事ことヲ不こと知ことズ。
 速すみやかニ伯ははき耆だいせんノ大まるり山まうすべニ参まうすべテ可こと申ことシ」ト。

『今昔物語集』巻第十四「僧明蓮持法花知前世語第十八」

（『新編 日本古典文学全集 35』小学館 1999：453）

例 23 の「いづれの御時にか」は、一般には、冒頭部に疑問推量の句がはさみこまれたものとされるが（佐伯 2019：211）、「ありけむ」が省略された文だとみる説もある（三谷 2002：45）。しかし、こういったとらえ方を否定して、そもそも和文（仮名文）は、句や節を次々と継ぎ足していくことで構成され、後続する部分との関係は必ずしも緊密ではない（「付かず離れず」の形をとる）とする見方もある（小松 1997：248-249）⁽⁹⁾。

以上、本節では、格助詞「に」、および、その転じた接続助詞「に」が、和文の文章展開において重要な役割を担っており、また、「～に」型の副詞や「に」から派生した複合辞が、漢文訓読体において多用されているということのみてきた。

4. 近代の文章における「に」の多用の終焉（文章（文体）の側面）

本節では、文章（文体）の側面から、近代の文章における「に」の多用の終焉、とくに接続助詞「に」の役割の終焉を中心にみていく。

近代文学（近代小説）の誕生には、新しい文体の創造が不可欠であり、その試行の過程において、「～に」などを用いて従属節を重ねていくような文章展開・文体は次第にみられなくなっていった。近代小説の誕生には、結果的に、「に」を多用する文章展開・文体からの脱却がかかわっているといえる。本節では、これについて、明治期の文学作品を例にみていく（例 28～32 はジャパンナレッジ『明治文学全集』、例 33 は『朝日新聞クロスリサーチ』による）。

4.1 和漢折衷体・漢文訓読体

明治に入ってからでも、その初期の和漢折衷体の文学作品には、「に」を多用する文章展開がみられる（例 28）。

- (28) 茲こゝに日本武蔵にっぽんむさしの国くに。昔むかしの江戸おほえど当時の東京とうじかんへとうけい 神田かんだの八丁堀はちりょうぼりに。住居すまゐは名ばかり大概おほかたは。旅たびにのみ光陰つぎひを送りし。枳とちめん面屋めんや弥次郎兵衛やじらうべゑ。北利喜多八きたりきたはちの二個ふたりの者ものに。一個宛ひとりづつの男子なんしあり。瓜うりの蔓つるに茄子なすは生ならず。彼等かれらもおなじく旅好たびずきにて。親父おやぢの遺のこせし旅日記たびのきに。歩行あゆみ余りし跡あとを踏ふみ。関せきの東ひがしは房総常野ぼうさうぢやうや。近郷近在きんごうきんざい 普あまねく経へめぐり奥羽おううの途とちう中で黄泉くわうせんの。長旅ながたびに赴おもむきしに。其又そのまた倅等せがれらふたり二個ふたりありて。是これぞ三世さんぜの弥次喜太八。

仮名垣魯文『万国航海 西洋道中膝栗毛』初編上（1870 刊）

（『明治文学全集 1』筑摩書房 1966：4）

一方で、学術的な文章などには漢文訓読体が使われるようになる（高野 1991：383）。漢文訓読体には、接続助詞の「に」による文章展開はみられないが、「～に」型の副詞や、「に」から派生した複合辞が多く用いられている（例 29）。また、翻訳によって生まれた複合辞（「によれば」など）なども使われるようになった（鈴木 2003：18-19）。

- (29) 西洋諸邦ハ勿論凡ソ地球上ノ人民其平常用フル所ノ言語ヲ以テ
 詩歌ヲ作ルヤ皆心ニ感ズル所ヲ直ニ表ハスニアラザルナシ 我日
 本ニ於テハ往古ハ此ノ如クナリト雖モ方今ノ学者ハ詩ヲ賦スレバ
 漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レバ古語ヲ援キ平常ノ言語ハ鄙ト為シ俗ト称シ
 テ之ヲ採ラズ 是レ豈謬見ト為サルヲ得ンヤ

夫レ我邦人ノ漢学ヲ修ムルヤ殆ド皆ナ所謂変則ナルモノニシテ
 漢土ノ本音ヲ以テ其文ヲ読下スルモノ甚少ナシ 然シテ韻書作例
 等ニ因テ平仄韻字ヲ学知スルモ之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ当テハ既ニ
 本音ヲ発スルニ非ザレバ到底室内ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ隔
 靴ノ憾ナキ能ハズ 何トナレバ凡ソ詩歌ハ意義ノ優美奇巧ナルハ
 素ヨリ望ム所ナレドモ音調ノ宜シキヲ得ルコト亦極メテ肝要ナレ
 バナリ

外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎撰『新体詩抄』初編（1882刊）
 尚今居士（矢田部良吉）「鎌倉の大仏に詣で、感あり」序
 （『明治文学全集 60』筑摩書房 1972：16）

4.2 坪内逍遙『小説神髓』

明治中期になると、西洋文学の影響で、近代文学（近代小説）のあり方
 が模索されるようになり、内容面、表現面での改革が求められるようにな
 った。その初の近代文学論である『小説神髓』で、坪内逍遙は、「人情
 の奥」を写すことや「新俗文」を創り出すことを主張している（例 30・
 31）。

- (30) このにんじやう おく うが いはゆるけんじんくんし らうにやくなんによぜんあくせいじや
 此人 情の奥を穿ち所謂賢人君子はさらなり老若男女善悪正邪
こゝろのうちまく もら ところ なが
 の心 のうちの内幕をば洩す所なく描きいだして周密精到人 情
しやくぜん み わがせうせつか つとめ
 をば灼然として見えしむるを我小説家の努とするなりよしや
にんじやう うつ そのひさう うつ これ まこと
 人 情を写せばとて其皮相のみを写したるものはいまだ之を真の

せうせつ
小説とはいふべからず そのこつずみ うが およ 其骨髓を穿つに及びてはじめて小説の
せうせつ
小説たるを見るなり

坪内逍遙『小説神髓』上巻（1885刊）「小説の主眼」

（『明治文学全集 16』筑摩書房 1969：16）

- (31) ぞくげん 俗言のまゝに ことば 詞をうつせば あいたい だんわ 相対して談話するが こと おもしろみ 如き興味あり
がぞくせつちゆう ふん 雅俗折衷の文をもて ことば 詞をつゞれば てがみ よ 書簡を読むの おもひ 思あり その 其おも
うす しろみの薄かることいふまでもなきことなりかし ぞくぶん り 俗文の利す
かく 以斯のごとし たどうらむ 唯憾らくは よ 世に そのふべん のぞ 其不便を除くの はふ 法なし あゝ 嗚呼我
たう 党の才子 さいした 誰が このはふ 此法を はつき 發揮すらん いま おのれは今より うなぢ 頸を なが 長うして
しんぞくぶん 新俗文の よ 世に ひ いづる日をまつものなり

坪内逍遙『小説神髓』下巻（1885刊）「文体論」

（『明治文学全集 16』筑摩書房 1969：35）

このように、近代文学（近代小説）には、内面性や写実、「言文一致」が求められるようになり、作者（語り手）が主人公の内面に深く入り込む「三人称客観描写」⁽⁴⁰⁾などが試みられていく（柄谷 2008：55-66）。それとともに、接続助詞「に」を多用する文章展開は次第にみられなくなっていく。

4.3 樋口一葉『たけくらべ』

明治 20 年代の終わりに発表された樋口一葉の『たけくらべ』（1895-1896）は、風物や人情を写實的、抒情的に描いた明治文学を代表する作品であるが、この作品には、和文の伝統を受け継ぐ、新しい節が次々に付け足されていく長い文がみられる（橋本 2022：188）⁽⁴¹⁾。この作品は、雅俗折衷体で書かれ、文語体の地の文のなかに、やや文語的な口語の会話文が、引用符なしに入り込んで、文が続いており、地の文には接続助詞の「に」も使われている（例 32）。

- (32) めづらしい事、この炎天に雪が降りはせぬか、美登利が学校を嫌やがるはよく〜の不機嫌、朝飯がす、まずば後刻のちかたに弥助でも誂へようか、風邪かぜにしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見ゆる、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免こふむれとありしに、いゑ〜姉さんの繁昌するやうにと私が願を懸けたのなれば、参らねば気がすまぬ、お賽銭下され行つて来ますと家を駆け出して、中田圃の稲荷に鰐口ならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも帰りも首うなだれて畦道づたひ帰り来る美登利が姿、それと見て遠くより声をかけ、正太はかけ寄て袂を押へ、美登利さんゆふべ昨夕は御免よと突然だしぬけにあやまれば。何もお前に詫びられる事はない。

樋口一葉『たけくらべ』(1895-96) (六)

(『明治文学全集 30』筑摩書房 1972 : 92)

4.4 夏目漱石『三四郎』

明治の末、日露戦争(1904-05)後になると、新しい文学の登場が待望されるようになり、その期待に応える形で新進の作家が登場してくる。夏目漱石はその1人である(大東 2006 : 6-8)。例 33 は、漱石の『三四郎』(1908)の冒頭部分で、三四郎の視点で話が進んでいるが、三四郎は語り手ではない。ここには、語り手の視点と登場人物の視点が混在する「自由間接話法」(free indirect discourse)⁽¹²⁾ や、「in medias res」(途中から語りだす文学技法)などがみられる(阿部 2017 : 14-15)。このころになると、言文一致体が使われ、文も短くなっている。

- (33) うと〜として眼が覚めると女をんなは何時いつの間まにか、隣となりの爺ぢいさんはなしと話を始めてゐる。此の爺ぢいさんは慥こに前ちいの前たしかの前まへの駅まへから乗つたえきの

ゐなかものはつしやまぎは とんきやう こゑ だ か こ き
 田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して馳け込んで来て、
 いきなりはだぬ おも せなか おきう あと いっぱい
 で、三四郎の記憶に残つてゐる。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、
 さんしろう きおく のこ ちい あせ ふ はだ い
 て、女の隣りに腰を懸けた迄よく注意して見てゐた位である。
 をんな とな こし か まで ちうい み くらゐ

夏目漱石『三四郎』一の一（『朝日新聞』1908/09/01）

4.5 接続助詞「に」の使用の変化

ここで、接続助詞「に」の使用の変化を見るために、試みに、『日本語歴史コーパス』（CHJ）（コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用）によって、『源氏物語』、明治20年代の小説（『浮雲』、『舞姫』、『五重塔』、『たけくらべ』、『今戸心中』）、明治末の小説（『吾輩は猫である』、『蒲団』、『何処へ』）における接続助詞「に」の出現頻度を調べてみた（それぞれについて、短単位検索（キー：「語彙素」が「に」AND「品詞」の「中分類」が「助詞-接続助詞」）を行った）。また、比較対象として、室町末期に出現したとされる（沖森2017：294）、順接の接続助詞「と」についても調べてみた（それぞれについて、短単位検索（キー：「語彙素」が「と」AND「品詞」の「中分類」が「助詞-接続助詞」）を行った）。

その結果は、次のとおりである（表3）。

表3 『源氏物語』、明治期の小説における接続助詞（CHJ）⁽¹³⁾

	『源氏物語』	明治20年代の小説	明治末の小説
検索対象語数	520,401	111,166	148,686
接続助詞「に」	2,103 (0.40%)	185 (0.17%)	72 (0.05%)
「然るに」「のに」の 2語を除いた場合	2,103 (0.40%)	165 (0.15%)	16 (0.01%)
接続助詞「のに」	0 (0.00%)	17 (0.02%)	47 (0.03%)
接続助詞「と」	0 (0.00%)	139 (0.13%)	655 (0.44%)

※（）内は、検索対象語数に対する百分率（%）。

表3からは、『源氏物語』に比べて、明治20年代の小説では、接続助詞「に」（接続詞「然るに」の「に」と接続助詞「の^{しか}に」の「に」を除いた場合のもの）の出現率が3分の1程度（0.40%→0.15%）まで減り、さらに、明治末の小説では、「に」はほとんど使われなくなり、代わりに「と」（順接の接続助詞）が多く用いられるようになったことが見てとれる（逆接の接続助詞「の^{しか}に」も使われるようになっている⁽¹⁴⁾）。ここから、明治末の小説では、文章展開に「に」が使われなくなっていたことがわかる。

この変化は、日本語に新しい文体が生まれ、機能語における意味・機能の厳格化が起こったためではないかと思われる。明治中期～後期において、日本語の文体は、それまでの、従属節を次々に付け足して、長い文で文章を展開する（前件と後件の結びつきが必ずしも緊密ではない）ゆるやかな構造のものから、前件と後件の関係が明確に限定される構造の文体へと変化していった⁽¹⁵⁾。こういった文体の変化にともなって、順接にも逆接にも使えて、節の内部にさまざまな要素を含めることができる「～に」節に代わり、多様な機能語が使われるようになっていったということではないかと思われる。

以上、本節では、近代文学（近代小説）の誕生には、「に」を多用する（従属節が次々に付け足されていくような）文章展開・文体からの脱却がかかっているということについてみてきた。

5. 現代語の会話における「に」（談話の側面）

本節では、談話の側面から、現代語の会話における特徴的な「に」の用法をみていく。

日本語の助詞は後置詞であり、通常、自立語の後ろに配置され、それらと結合することによって、格関係などの意味を表す。しかし、現代日本語

の談話においては、自立語と切り離されて助詞が使用されることがあり、自立語と助詞との間に様々な発話が入り込むという現象がみられる。そうした場合の「に」の機能について、以下では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2021年3月版』より例を挙げていく⁽¹⁶⁾。

5.1 「に」による発話の再開

(34)

ライン番号	話者	発話内容
80	JF113	男の人に逆に（んー）、だから例えばね、警備員とかね、そういうね、男の人に、＜笑い＞、
81	JM041	はい。
→ 82	JF113	に逆に有利な仕事っていうか、派遣とかもあるんじゃないの？。

(261-17-JF113-JM041)

例 34 において、JF113 は笑い と 相づち で 中断 した 発話 を ライン 82 で 再開 している。この 発話 は、ライン 80 の「男の人」につながるものであるが、「に」をくり返すことによって、再開した発話がどこに結びつくのかが明確になっている。

(35)

ライン番号	話者	発話内容
32	JF181	就活とかね、退院してからやったんだけどー（うん）、9月に入院して。
33	JF181	で、き【。
34	JF182	】こないだの9月？。
35	JF181	うん。
→ 36	JF182	に入院したんだ。
37	JF181	うん。

(329-23-JF181-JF182)

例 35 において、JF182 は、ライン 34 で相手に確認を求め、反応を受けた後に、ライン 36 で発話を再開し、さらに確認を求めている。談話では、発話内容が不明確な場合などに参加者によって修復が行われることがあるが、名詞の直後で発話を切り、段階的に確認することで、より確実に修復を進めることができている。そして、「9月」をくり返すことなく「に」で再開することにより、発話が冗長になることが避けられ、スムーズに発話を進めることが可能になっている。

発話の中断は、対話相手によってもたらされる場合もある。

(36) (JM011 の仕事についての話)

ライン番号	話者	発話内容
255	JM012	やっぱ港なんだ。
256	JM012	港 < に > < 。
257	JM011	< そ > > , 港のあるとこだね。
258	JM012	ほー < ーん > < 。
259	JM011	< うん > > 。
→ 260	JM012	に、なんか、なに、本部だか支部だかがあって。
261	JM011	うん。
262	JM012	事務局みたいのがあって。
263	JM011	うん。
264	JM012	そこに、通勤するわけ？。

(006-01-JM011-JM012)

例 36 では、JM012 が発話をしていたが、ライン 257 で JM011 が JM012 の発話に割り込んできた。割り込まれた JM012 は 256 の発話を中断したが、258 で JM011 の発話に反応したあと、260 で再度ターンを取っている。この 260 の発話は冒頭に「に」が置かれることによって、それが 256 に続くものであることが明確になっている。

5.2 「に」による共同発話の構築

5.1 では、中断された自分の発話を「に」によって再開する事例について述べたが、「に」以降を対話相手が担い、発話を続ける場合もある。

(37)

ライン番号	話者	発話内容
18	JM092	=あとは、《少し間》なんかインフラ整備とか、橋一とか一、《少し間》そうですね、そういう、《少し間》あのインフラ系一とか、をやるような学科でして。
19	JM091	<は一> > , そう ##[小声で]。
20	JM092	はい。
21	JM091	えっと、建築とかそういう方向性<とは、またちょっと違う [→]> < ?。
→ 22	JM092	<に、ま一、ちょっと近い> > , 《少し間》ですけれど一、建築学科とはまた別であって一(は一), 《少し間》それは建築士になるというよりは、その全体を見て一、ま、計画とかそっ…ち系ですかね(うん), をやるような感じですね。

(372-25-JM091-JM092)

この例 37 において、ライン 18 の説明を聞いた JM091 が、ライン 21 で「建築とかそういう方向性」と話し始めると、JM092 はライン 22 で「に、ま一、ちょっと近い」と発話している。これは JM091 の発話につながっており、「共同発話」を構築しているといえる。こうした共同発話をするためには、相手からターンを取るだけでなく、相手の発話を内容的にも文法的にも継続させる必要があるが、名詞をくり返さず、「に」で開始することで、即座に相手発話に入り込むことが可能になるだけでなく、格助詞「に」を用いることで、後続の発話の内容も方向付けることができる。「に」で開始することによって、談話展開もコントロールすることができる例であるといえる。

このように、談話では名詞に直接後続しない「に」のさまざまな使用例が見られるが、いずれも「に」で開始することによって、前後の結束関係が明確になっている。林（2008）はディスコースマーカーの機能のひとつとして、談話全体の一貫性を構築する「テキスト構成的機能」を挙げているが、上記のような「に」もそのようなディスコースマーカーとしての機能を果たしているといえるかもしれない⁽¹⁷⁾。

6. おわりに

本稿では、日本語の機能語「に」が成立、展開、変化していく様子を、文法・意味、第二言語習得、文章（文体）、談話の各側面から、通時的・共時的にみてきた。言語に関する研究は、一つあるいは少数の研究領域（たとえば、文法論）の範囲内で研究されることが多いが、本稿は、これまで各領域で研究が蓄積されてきた「に」を、主に時間軸を基軸として連関させることを試みた。同じ対象を分野横断的に観察・分析することで、対象を立体的にとらえることができ、「に」に対する新たな見方を提供できたのではないと思われる。

今回は4つの側面から見てきたが、現代の文学作品や方言等にも対象を広げて「に」をさらに多面的にとらえていくことを今後の課題としたい。

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費基金（若手研究）（代表者：呂芳，課題番号：21K13009）によるワークショップ「言語が生成される場を探る—教育・談話・作品から」（2024/06/15 立命館大学）における基調講演「言語の生成される場における「に」をめぐる」（講演者：阿久津智，コメンテーター：平山紫帆）を基に、内容を大幅に増やしてまとめたものである。

（1～4節は阿久津が担当し、5～6節は平山が担当した。）

《注》

- (1) 「文法格」（構造格）とは、主格（～が）、対格（～を）、与格（～に）など、動詞の要求する格である（英語や中国語などでは、語順で表されることが多い）。これに対して、動詞などに対する意味的な関係（意味役割）を示す格は、「意味格」（深層格）と呼ばれる（斎藤ほか編 2015：32（長屋尚典執筆）、日本語文法学会編 2014：93, 97（仁田義雄、杉本武執筆））。
- (2) 「結果」や「状態」などの「に」については、指定の助動詞「なり」（口語では「だ」）の連用形とみる説もある（時枝 2020：193, 396）。
- (3) 主に、林・安藤編（2017：752-753）による。
- (4) 「で」は、「にて」（「に」+「て」に由来）から生まれた格助詞で、平安時代中期に登場したとされる（沖森 2017：101, 170）。
- (5) 『万葉集』の「相思ふ」の例（全 16 例）は、すべてこの意味（相手のことを思う）のようである。例：「相思はず 君はあるらし（不相思公者在良思）」（巻第十一 2589 番歌）（『新編 日本古典文学全集 8』の訳は「わたしを思わないで あなたはいらっしゃるのですね」）。ただし、いずれも歌の中には相手を示す「に」や「を」は現れていない。
- (6) 主に、野村（2021：142）、益岡・田窪（1987：4-5）による。
- (7) 一方で、平安時代の和文系の副詞「いと」、「とく」、「かたみに」などは継承されていない（山本 2018：118）。
- (8) 時枝誠記の文法論などでは、これを指定の助動詞「だ」の連用形としている（時枝 2020：193）。
- (9) 物語の冒頭に、時を示すのに「いづれの御時にか」という疑問の表現が使われているのは、平安時代には、「何か」、「いつか」のような不定を表す連語が未成立であったためであろう。もし不定を表す語があれば、「いづれかの御時に」と表現することもできたと思われる。なお、「いづれか」は、『源氏物語』の『夕顔』に、「いづれか狐なるらん」という例が見られ、『新編 日本古典文学全集 20』では、これを「どちらかが狐なのだろうね」と訳しているが、文法的には、「どちらかが狐なのだろうかね」のような疑問の形式とみるべきだと思われる。
- (10) 柄谷（2008：64）は、「三人称客観」について、島崎藤村の『破戒』（1906 刊）を例に挙げ、「語り手は主人公を通して世界を視ている。その結果、読者はこれが語られているのだということ、つまり語り手がいるのだということをおぼえてしまう。」と述べている。
- (11) 塩田（1960：216-217）は、『たけくらべ』について、「その抒情を読者に納得させて行ったものは、一葉の客観的描写態度であった。観察の緻密で

且つ特徴を捕えてやまない写実的態度であった。それに平安朝の冗漫な文脈を簡潔に刈り込んで行った文章の魅力も手伝った。」と述べている。

- (12) 「自由間接語法」とは、時制と人称は語り手の視点を反映し、そのほかの直示表現は登場人物の視点を反映する表現である（山口 2009：217-218）。日本の古典文学にもみられるとされる（三谷 2002：66）。日本語のものを、英語などの「自由間接語法」とは区別して、「半心内独白」と呼ぶ見方もある（山岡 2012：34, 51）。
- (13) 「中納言」による接続助詞「に」の検索結果には、接続詞「然るに」の「に」や接続助詞「のに」の「に」が含まれるため、表3には、これらを除いたもの（「然るに」「のに」の2語を除いた場合）も挙げた。「然るに」は、「前方共起1：キーから1語：語彙素が「然る」」を加えて、「のに」は、「前方共起1：キーから1語：語彙素が「の」」を加えて検索した。
- (14) 逆接の接続助詞「のに」（「の」＋「に」に由来）は、江戸前期に生じ、江戸後期以降、次第に優勢になったという（沖森 2017：363, 422）。
- (15) 小松（1997：247-249）は、和文の物語における文章について、「句節をつぎつぎと継ぎたすことによって構成されるために、後続する部分に対する関係が、必ずしも緊密でない形式をとる」として、これを「連接構文」（比喩的に「流体構造」）と呼んでいる。これに対し、「現行の書記言語のような、句節の相互関係を明確に限定する文体」を「拘束構文」（比喩的には「固定構造」）と呼んでいる。
- (16) 本節で用いた記号は以下の通りである（宇佐美 2019 による）。
- <> <| …< > に囲まれた部分が、他者に発話を重ねられた部分であることを示す。
- <> <| …< > に囲まれた部分が、発話を重ねた部分であることを示す。
- () …短く、特別な意味を持たない相づちを示す。相手の発話中の最も近い部分に記述する。
- 【】 …発話文が完結する前に相手の発話が始まり、結果として終了した発話であることを示す。
- 】 …相手の発話文が完結する前に途中に挿入する形で開始したために、相手の発話を終了させた発話であることを示す。
- そのほかの記号は宇佐美（2019）参照。なお、本節で使用した例の記号は一部省略してある。
- (17) 磯野・上伸（2016：91）の「表4：日本語母語話者のディスコースマーカ―」に「に」がみえる。

【参考文献】（URLについては、最終閲覧は2024年6月）

- 阿部公彦（2017）『名作をいじる：「らくがき式」で読む最初の1ページ』立東社
- 家田章子，中村かおり（2017）「アニメーションを用いた格助詞の指導：日本語教育現場における試み」『麗澤大学紀要』100，麗澤大学，23-33
- 庵功雄（2017）「学習者コーパスを用いた誤用観察の一試案：格助詞「に」を例に」『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』日中言語文化出版社，1-14
- 磯野英治・上仲淳（2016）「日本語学習者がターン交替時に使用するディスコースマーカー：日本語母語話者との比較」『日本語研究』36，首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会，87-95
- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』イセブ／凡人社
- 于康（2013）「中国語母語話者の日本語学習者の「格助詞」不使用について：格助詞「が」の不使用を中心に」『言語と文化』16，関西学院大学，59-75
- 宇佐美まゆみ（2019）「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019年改訂版」言語社会心理学研究所
<https://isplad.jp/lab/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf>
- 大東和重（2006）『文学の誕生：藤村から漱石へ』講談社
- 沖森卓也（2000）『日本古代の表記と文体』吉川弘文館
- 沖森卓也（2017）『日本語全史』筑摩書房
- 小田勝（2020）『古代日本語文法』筑摩書房（初刊2007）
- 柄谷行人（2008）『定本 日本近代文学の起源』岩波書店（初版1980）
- 京極興一（1987）「接続助詞「に」「を」「が」の成立と展開」山口明穂編『国文法講座3：古典解釈と文法 助詞の機能』明治書院，190-223
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版
- 国立国語研究所（1996）『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究：助詞史の素描』桜楓社
- 此島正年（1983）『助動詞・助詞概説』桜楓社
- 小松英雄（1997）『仮名文の構文原理』笠間書院
- 近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 斎藤純男，田口善久，西村義樹編（2015）『明解言語学辞典』三省堂
- 佐伯梅友（2019）『古文読解のための文法』筑摩書房（初刊1995）
- 迫田久美子（2020）『日本語教育に生かす 第二言語習得研究 改訂版』アルク（初版2002）
- 塩田良平（1960）『人物叢書 樋口一葉』吉川弘文館

- 莊司育子（2015）『日本語の統語的原理：「収束」と「展開』大阪大学出版会
- 鈴木一彦, 林巨樹編（1985）『研究資料日本文法7：助辞編3 助詞・助動詞辞典』
明治書院
- 鈴木英夫（2003）「明治の表現：格助詞「に」を中心に」『日本語学』22(13),
明治書院, 13-23
- 杉村泰（2002）「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1, 名
古屋大学言語文化部, 39-55
- 高野繁男（1991）「漢文訓読体の語法」森岡健二編『近代語の成立 文体編』明
治書院, 383-403（初出1974）
- 築島裕（1965）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 時枝誠記（2020）『日本文法 口語篇・文語篇』講談社（初刊1950, 1954）
- 中川ゆかり（1995）「古事記のくふう：目的語（ヲ格）を明示するために」古事
記学会編『古事記研究大系10 古事記の言葉』高科書店, 157-189
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法辞典』大修館書店
- 野村貴郎（2021）「助詞」沖森卓也編『日本語文法百科』朝倉書店, 137-162
- 橋本進吉（1969）『助詞・助動詞の研究』岩波書店（1931, 1935 講義）
- 橋本陽介（2022）『中国語は不思議：「近くて遠い言語」の謎を解く』新潮社
- 林巨樹, 安藤鶴子編（2017）『新全訳古語辞典』大修館書店
- 林宅男（2008）『談話分析のアプローチ：理論と実践』研究社
- 益岡隆志, 田窪行則（1987）『日本語文法 セルフマスターシリーズ3 格助詞』
くろしお出版
- 松村明編（1969）『古典語現代語 助詞助動詞詳説』學燈社
- 三谷邦明（2002）『源氏物語の言説』翰林書房
- 峰岸明（2022）『変体漢文』吉川弘文館（初刊1986）
- 森山新（2008）『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得：日本語教
育に生かすために』ひつじ書房
- 山岡實（2012）『文学と言語学のはざまで：日英語物語の言語表現分析』開拓社
- 山口治彦（2009）「視点の混在と小説の語り：自由間接話法の問題をめぐって」
坪本篤朗, 早瀬尚子, 和田尚明編『「内」と「外」の言語学』開拓社, 217-
248
- 山本真吾（2018）「漢字が日本語を育ててきた：理解と表現の道程」日本漢字学
会編『漢字学ことはじめ』日本漢字能力検定協会, 101-120
- 呂芳（2022）「中国語を母語とする日本語学習者における格助詞「に」の脱落に
ついて：時間名詞に後接する「に」の脱落を中心に」『日語偏誤与日語教学
研究』7, 日語偏誤与日語教学学会, 136-153

【使用コーパス・データベース類】（いずれも最終閲覧は，2024年6月）

『朝日新聞クロスリサーチ』朝日新聞社

<https://xsearch.asahi.com/>

宇佐美まゆみ監修『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）
2021年3月版』（以下に統合）

宇佐美まゆみ代表『BTSJ 1000人日本語自然会話コーパス』日本語学習者の日
本語使用の解明

https://isplad.jp/btsj_corpus/

東京外国語大学『国際日本語学習者作文コーパス及び誤用辞典』東京外国語大
学

https://corpus.icjs.jp/corpus_ja/

『日本語歴史コーパス』（中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03）国立国語研究
所

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>

『ジャパンナレッジ』ジャパンナレッジ

<https://japanknowledge.com/>